

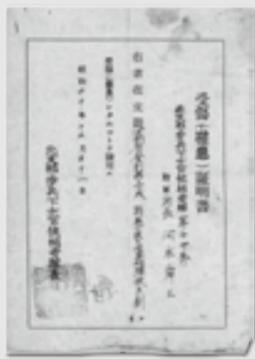
中国戦線と引き揚げ任務で見たものは

河本舜三さん(西上)

思いも奇らぬ召集令状

兵隊に行く前、わたしは青年学校の教員をしていました。当時は国民皆兵でしたから、20歳になった昭和18年に徴兵検査を受けました。「すぐに召集はないだろう」と一つ上の教員の試験を受けるため勉強していましたが、すぐに赤紙(召集令状)が来てしまいました。昭和18年12月10日に岡山へ入営することになったので、青年学校も2学期の途中で辞めて入隊しました。当時は兵隊に行くことが男の本懐だと信じていたので、やっと一人前になったと思ったものでした。

入隊して博多港から朝鮮半島に渡り、中国の順徳に着きました。そこで受けた初年兵教育は非常に厳しいものでした。配属された重機関銃の中隊では、機関銃を分解し、陣地に運んで組み立て、射撃をする、また分解して次の陣地に



▲河本さんの受傷証明書

向かうという訓練や敵地に侵入していく訓練など3カ月間厳しく鍛えられました。

友の死、自らも負傷

昭和19年、初めて参加したのが河南作戦でした。部隊は次々と勝ち進んで中国内陸へと進んでいきましたが、交戦中に敵弾にやられ戦死する人も多く見ました。前線に弾薬を運び匍匐前進で戻る途中、わたしの目の前で撃たれた戦友は血を吐いて死んでしまいました。

昭和19年8月、敵の迫撃砲攻撃に遭い、わたしは右足を負傷しました。衛生兵にトラックの荷台に担ぎ上げられ陸軍病院に向かいましたが、車上では汚物を垂れ流すしかなく、それは惨めでひどいものでした。病院では破片を摘出もせず、腫れがひいたらすぐ部隊に戻されました。

その後、北京近くの石家庄にある下士官候補者隊に転属になり、そこで終戦の玉音放送を聞きました。雑音でよく分かりません。ただ日本が負けたことが信じられませんでした。

過酷な引き揚げの現場で

終戦直後から、日本に引き揚げ一般邦人の援護のために鉄道な

どの沿線の警備につきましました。戦争は終わっても略奪などで日本人を襲う者がいたので、その警備をするように命令がありました。わたしは機関銃を持って警備につき、そこで初めて実弾を撃ちました。その後、引き揚げ船が出ている天津で引き揚げ者の世話をしよう命令が出ました。

引き揚げてくる人の中には途中で略奪に遭ったのか、着の身着のままの人や小さな荷物を持つているだけの人もいました。引き揚げ船が出航するまで数日間はこちらで待たされます。飲まず食わずの状態引き揚げ船に乗る人も多く、憔悴(せうすい)しきった表情は本当に気の毒でした。

引き揚げ者の中にはわたしと同郷の人がおり、他愛もないことで



夫の帰りを待ちわびて

高矢君子さん(加茂町小中原)

短かった夫との暮らし

わたしが結婚したのは昭和14年20歳の時。結婚相手には兵隊に行つたことのある人がいいと、兄が夫を薦めてくれたのです。夫は目が大きくて、体格の良い、商売上手な人でした。

結婚してから、津山で商売をしていましたが、その間に3回召集され、一緒に過ごしたのは正味2年ほど。昭和20年3月に4回目の召集があり、それが最後となりました。

戦争は終わったのに……

終戦後も朝鮮半島で警備についていた夫は、南下してきたソ連軍に連れて行かれ、シベリアに抑留(よくりゅう)されてしまいました。

加茂地域には夫と同じようにシベリアに抑留された人が多くいま

した。一刻も早く帰してほしくて、ほかの家族の皆さんと一緒に引き揚げ運動をしました。東京まで行って、ソ連の領事館にお願いしてね。そうしたら、体の弱った人から帰しましょうと、言ってくださ

って。夫は1年間強制労働させられ、向こうで倒れてしまっていたので、第一陣で帰国することが決まりました。しかし、護送中、満州の長春という所で動けなくなつてね……。この病院で昭和21年10月2日に亡くなりました。

病死でも遺品などは何も帰ってきません。夫の最後を看取ってくれた人の話では、

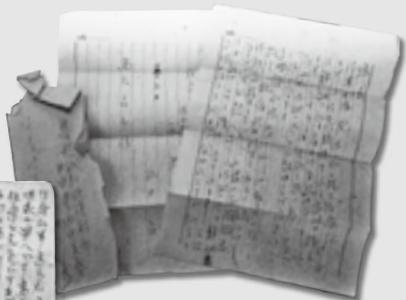
毎日50人ぐらいの人が病院で亡くなったそうです。

夫の姿を求めて

夫が元気な時に書いた手紙が、亡くなってだいぶたってから手元に届きました。手紙には「元気でいるから」と書いてありましたが、そんな手紙を見ると、いてもたってもいられなくて……。夫の話を直接聞きたくて、手紙を届けてくれた人に会いに行つたこともありま

最後の別れとなった4回目の召集の時、長男は5歳、次男は3歳でした。夫は「2人の子どもがおるけん、とつても力強いんじや。わしは絶対帰ってくるけん」と言つて出征しました。それまでの召集はわりと短い期間で、3、4カ月で帰ってくるのができました。今回もそれくらいで帰つてくると信じていましたから、これが最後だなんて思いもしません。人間って分からないものです。「絶対帰る」という言葉を疑つていなかったのにね。

亡くなったとの知らせが来るまで、夫の帰りをどれだけ待ったことでしょうか。カチャカチャと軍靴の足音がすると、夫が帰ってきたのではないかと聞き耳を立てました。家の前で止まるんじゃないかとドキドキしながら。でも、足



▲君子さんに届いた夫・清市さんの安否を知らせる手紙など

音はいつも通り過ぎてしまいます。そんなことが毎日続きましたね。

戦争で夫を亡くした人は誰もが大変な苦労をしました。わたしも苦しい生活の中、2人の子どもを一生懸命育てました。苦労を共にした子どもたちは今もよくしてくれます。わたしがこれまで元気でいられたのも夫のおかげだと思っています。

どうか平和な世に

わたしたちの若いころは「戦争に行きたくない」なんて言うことはできませんでした。命を懸けて戦いに行く夫の代わりに、妻は全力で家を守るしかなかったのです。悲惨な事件が後を絶たない今の時代が本当に平和なのかどうかは分かりません。でも、どうか平和であってほしいと心から願います。